

2024/9/29

ルカの福音書 講解メッセージ②④

『ルカの福音書 9章 46-62節 苦しみについて』

■小さい者と反対しない者と受け入れない者

「さて、弟子たちの間に、自分たちの中で、だれが一番偉いかという議論が持ち上がった。しかしイエスは、彼らの心の中の考えを知っておられて、ひとりの子どもの手を取り、自分のそばに立たせ、彼らに言われた。「だれでも、このような子どもを、わたしの名のゆえに受け入れる者は、わたしを受け入れる者です。また、わたしを受け入れる者は、わたしを遣わされた方を受け入れる者です。あなたがたすべての中で一番小さい者が一番偉いのです。」

(ルカ 9:46-48)

誰が偉いかと競い合っていた弟子たちに、イエス様は「1番小さい者が1番偉い」と言われました。

一般的には、子どもよりも大人のほうが多くことができます。しかし、子どもは自分が弱い存在であることを自覚しています。神の目から見れば、この“自分の弱さを知る力”こそが、最も尊いのです。

私たちは、神と共に生きていて、神に支えられています。神の思いは、いつも私たちの心に語りかけています。

人々はそれを「良心」や「心の声」と呼びます。悪いことをすると「いけないことをしてしまった」と心が痛くなるのは、心の内で誰かが「それは悪いことだ」と告げているからです。それこそが神の声です。

人は一人で生きているのではなく、神と共に生きておられます。しかし、私たちはその方を見ることも認識することもできないため、自分一人で生きていると思い込んでしまいます。だからこそ、自分をよく見せようと頑張り、互いを比べて誰が偉いかと競い合ってしまうのです。

けれども、私たちを支え、共に生きてくださる神は、私たちが無力になればなるほど、弱くなればなるほど、豊かに恵みを満ち溢れさせてくださいます。反対に、自分を強く見せようとすればするほど、自分が偉いと言えば言うほど、神は共におられても前に出てきてはくさいません。

自分の弱さに気づき、神の前にへりくだることができるなら、神は前面に出てきてくださり、あなたを引き上げてくださいます。

神は、私たちの弱さのうちに働かれます。私たちは神によって生かされており、神の恵みこそがすべてです。しかし、あなたが「自分は強い」と思い、自分の力で頑張ろうとするほど、その恵みは見えなくなります。

けれども、自分の無力さに気づき、自分の弱さを知れば知るほど、そこに神の恵みが見えてくるのです。

苦しみを覚えない人は、神を知ることができません。苦しみを覚えれば覚えるほど、そこに働く神の恵みが見えるようになります。苦しみを知らない人は、神を知ることができないという別の苦しみを負うこととなります。

神と私たちを結ぶもの——それが苦しみなのです。

「ヨハネが答えて言った。「先生。私たちは、先生の名を唱えて悪霊を追い出している者を見ましたが、やめさせました。私たちの仲間ではないので、やめさせたのです。」しかしイエスは、彼に言われた。「やめさせることはありません。あなたがたに反対しない者は、あなたがたの味方です。」

(ルカ 9:49-50)

神は私たちの内におられ、「私の手を取りなさい。そうすれば、私はあなたを助ける」と呼びかけておられます。その呼びかけに応答し、神の御手にすがる者は救われます。救われた人は、神に敵対しなくなります。

救われるということは、神にとらえられたということです。人は、イエス・キリストにとらえられることで、信じることができるようになります。そしてイエス・キリストを信じることができると、救われたという自覚に至ります。

私たちが神の言葉を求めるのは、実はすでに神にとらえられているからです。神にとらえられているがゆえに、神のことを考え、神を思い、神を知ろうとするのです。

ですから、「反対しない者は味方である」と言われるのです。反対しない人とは、すでに神にとらえられている人だからです。

「さて、天に上げられる日が近づいて来たころ、イエスは、エルサレムに行こうとして御顔をまっすぐ向けられ、ご自分の前に使いを出された。彼らは行って、サマリア人の町に入り、イエスのために準備した。しかし、イエスは御顔をエルサレムに向けて進んでおられたので、サマリア人はイエスを受け入れなかった。」(ルカ 9:51-53)

「天に上げられる」とは、十字架につけられるということです。

エルサレムは神の神殿がある場所であり、「神の国」を象徴しています。イエス様は神の国に目を向け、神の国に向かってまっすぐ進んでおられました。簡単に言えば、心を神に向けておられたということです。

そのような中でサマリヤに入りましたが、サマリヤ人は、イエス様が自分たちに目を向けず、神のほうばかり見ておられるとして腹を立ててしまいました。

それは、サマリヤ人の心が「人」に向いていたからです。サマリヤ人に限らず、この世界では多くの人が神ではなく人を見ています。人は、自分と関わり、自分を受け入れ、同調し、同情してくれる人を受け入れます。

ですから、自分に同調も同情もせず、人に心を向けずに神をまっすぐ見ておられるイエス様を、サマリヤ人は受け入れることができなかったのです。

しかし、この出来事には深い意味があります。

それは、「神の国と神の義をまず第一に求めなさい」というメッセージです。神の国に目を向けるなら、私たちの内にある苦しみは解決へと導かれる、と教えているのです。

人は苦しみを覚えると、人に助けを求めてなんとかしようとしみます。私たちが人に目を向けるのは、人から同情を得て、自分の苦しみを解決したいからです。

しかしイエス様はそうなさいませんでした。神の国を見つめられたのです。なぜなら、解決は神の国にこそあるからです。

この出来事は、苦しみの解決は神の国にあるのだと、私たちに示しています。つまり、イエス様は「神に目を向けなさい」ということを暗に教えておられるのです。

いずれにしても、サマリヤ人がイエス様を歓迎しなかったため、弟子たちは怒りを覚えました。

「弟子のヤコブとヨハネが、これを見て言った。「主よ。私たちが天から火を呼び下して、彼らを焼き滅ぼしましょうか。」しかし、イエスは振り向いて、彼らを戒められた。そして一行は別の村に行った。」（ルカ 9:54-56）

サマリヤ人がイエス様を拒んだとき、ヤコブとヨハネは怒り、「天から火を呼び下して焼き滅ぼしましょうか。」と言いました。しかしイエス様は彼らを戒められました。

神を第一に求めると、嫌われたり、迫害されたりすることもあります。その時、怒るのではなく、愛することをイエス様は教えておられます。私たちのすることは復讐ではなく、愛することです。

■ 苦しみの先にある平安

「さて、彼らが道を進んで行くと、ある人がイエスに言った。「私はあなたのおいでになる所なら、どこにでもついて行きます。」」（ルカ 9:57）

「イエス様、あなたを信じます。どこへでもついて行きます。弟子にしてください」と言う人たちに、イエス様は、次のように答えられました。

「すると、イエスは彼に言われた。「狐には穴があり、空の鳥には巣があるが、人の子には枕する所ありません。」」（ルカ 9:58）

イエス様は、「私に従うなら、この世界は安全な場所ではなくなります。この世を敵に回すことになります。」と言っておられるのです。つまり、イエス様に従うとは、苦しみの中に踏み込むことなのだ、イエス様は言われたのです。

「神に従う」ということは、この世の価値観と対立するということです。神は真理です。真理に従って生きようとする者は、真理に従わない人々の敵となります。あなたがイエス・キリストを信じ、その教えに従って生きようとするなら、そこには必ず苦しみが生れます。

「あなたは苦しみを共にできますか。迫害を共に受けることができますか。この世界から憎まれても、なお私と共に歩みますか。」イエス様は、そう問いかけておられます。

キリスト教は、あなたを“楽にする”教えではありません。むしろ、あなたを苦しみの中へと導きます。しかし、その苦しみの先には、この世では得られない平安と喜びがあります。キリスト教は、苦しみを通して私たちを整える教えなのです。

「イエスは別の人に、こう言われた。「わたしについて来なさい。」しかしその人は言った。「まず行って、私の父を葬ることを許してください。」すると彼に言われた。「死人たちに彼らの中の死人たちを葬らせなさい。あなたは出て行って、神の国を言い広めなさい。」」（ルカ 9:59-60）

イエス様が「私についてきなさい」と言われたとき、この人は「わかりました」と即座に答えました。しかしその前に、お父さんが亡くなっていたので、「まず葬儀を済ませてからにさせてください」と願い出ました。この世界で最も優先されるべきことは、葬儀です。ですから、この男性も、「わかった。では葬儀をしてから私についてき

なさい」と言ってくださるだろうと思っていたことでしょう。ところがイエス様は、「葬儀は他の人に任せなさい。あなたは私についてきなさい」と言われたのです。

つまり、神に従うこと、キリストに従って生きることは、第一優先であるということです。それより優先されるべきことは、本来あってはならないのです。

私たちは本当に、神に従うことを第一にして生きているのでしょうか。優先順位を決めるのは、他の誰でもなく、あなた自身です。あなたにとって神は何番目でしょうか。

キリストに従うということは、本来、第一にすべきことなのです。しかし、それはこの世界では敵をつくることにもなります。「あいつは交わらないやつだ」「自分たちとは違う」と、周りから嫌われ、迫害を受けることもあります。

神を第一にして生きるということは、苦しみを選ぶことでもあるのです。それでもイエス様は、「それをしなさい」と言われたのです。

「別の人はいこう言った。「主よ。あなたに従います。ただその前に、家の者にいとまごいに帰らせてください。」するとイエスは彼に言われた。「だれでも、手を鋤につけてから、うしろを見る者は、神の国にふさわしくありません。」

(ルカ 9:61-62)

今度の方は、「もちろんついていきます。でもその前に、家族に別れを伝えるために家に帰らせてください」と言いました。この世界では、ごく普通のことです。しかし、私たちの主であるイエス・キリストは、「ダメだ」「後ろを振り向くな」と言われました。「ついていく」と言ったのなら、ついてきなさい——そう命じられたのです。

それは、イエス様が私たちと真剣に向き合っておられるからです。「本当に私についてくるとはどういうことなのか、よく考えなさい」と、チャンスを与えておられるのです。

神の戒めは、「まず神を愛し、神を第一にしなさい」です。しかし、私たちはいろいろな言い訳をして、どうしても神様が二番目、三番目になってしまうものです。そんな私たちが本当に真剣に神に聞き従おうとするなら、それは苦しみの中に突入することになります。

しかし、その苦しみの先には、真剣に神に目を向け、真剣に従うときに得られる、真の喜びと平安があります。神は、この世が与える平安ではなく、真の平安を私たちに与えたいと願っておられます。それは、苦しみのときでなければわからないものなのです。

■心の仕組み

苦しみとは、あなたが神に向かおうとするときに起きるものです。それは、キリストに従うかどうかに限らず、友達との関係でも同じです。

苦しみを覚えるのは、あなたが思い描く理想と現実のギャップです。「こういう人間でありたい」と願っているのに、現実はそうではない。人からよく思われたい、無条件で愛されたいと願っているのに、そうならない。このギャップが苦しみを生み出します。ここで重要なのは、苦しみを引き起こしているのは、あなたの“理想”だということです。

では、その理想はどこから来るのでしょうか。それは神から来ています。誰もが神を知っているのに、「こうあるべきだ」という理想を知っているのです。しかし現実はそのようではない。だから苦しみが生じます。

たとえば、誰もが「人を愛したほうがいい」と知っています。しかし愛せないのが苦しみます。つまり、苦しみとは、神への意識なのです。

これが心を深く掘り下げると見えてくる、人間の心のありようです。人は神を知り、神の声を聞いているにもかかわらず、それを選べないから、このギャップで苦しむのです。しかし、そのことに気づいていません。

つまり、苦しみに気づき、苦しみと向き合えば向き合うほど、神と向き合うことになるのです。そして、その苦しみの中で叫ぶなら、神はあなたに答えてくださいます。ここに平安があります。だからイエス様は「私についてくるなら、〇〇をしなさい」と、難しく、できそうにないことを語られるのです。つまり、苦しみとは神への意識であり、苦しみこそが神様と出会う入り口なのです。このことに気づかせるために、イエス様は私たちに苦しみをぶつけてこられるのです。苦しみを覚えれば覚えるほど、人は頭が下がります。そうすると、神の恵みが見えるようになります。キリスト教の教えはまさに苦しみの教えであり、その先に喜びがあります。聖書の中で、多くの人がそのことを証ししています。

■苦しみを通して、神の愛を知った人たちの証し

「私が呼ぶとき、教えてください。私の義なる神。あなたは、私の苦しみのときにゆとりを与えてくださいました。私をあわれみ、私の祈りを聞いてください。」（詩篇 4:1）

苦しみこそが祝福の入り口だったという証しです。苦しみの最中には、「もう自分はダメだ」と思ってしまいます。しかし後になって振り返ると、実はあの苦しい時こ

そ、神がそばにいてくださり、私を助けてくださっていた——そのことに気づくのです。

「私は苦しみの中に主を呼び求め、助けを求めてわが神に叫んだ。主はその宮で私の声を聞かれ、御前に助けを求めた私の叫びは、御耳に届いた。」

(詩篇 18:6)

ここで証ししていることは、「苦しみの中で私は叫んだ」ということです。人は、苦しみの中に置かれるとき、初めて真剣に神を呼び求めることができます。もし苦しみがなければ、どうやって神を求めるでしょうか。苦しい時、人は誰でも「神さま、助けてください」と心から叫びます。つまり、私たちが神と真剣に出会う入り口は、まさに苦しみなのです。

苦しみの時の叫びを、神は確かに聞いてくださいます。苦しみこそが、恵みの入り口なのです。

「しかし、この私は、あなたの力を歌います。まことに、朝明けには、あなたの恵みを喜び歌います。それは、私の苦しみの日、あなたは私のとりで、また、私の逃げ場であられたからです。」(詩篇 59:16)

自分が苦しい時、本当に私の逃げ場となったのは神でした。人の言葉ではありません。人の慰めは、私の苦しみには何の力もなく、助けにもなりません。しかし神は、私の苦しみをそのまま引き受け、抱きしめてくださいました。だからこそ、どんな苦しみであっても、私たちは神に叫び求めるのです。すると神は、その苦しみを包み込み、やがて喜びへと変えてくださいます。ここに福音があります。

ですから、もし「苦しみに出会ったことがない」という人がいるなら、その人はまだ神と深く出会っていないということになります。なぜなら、神は苦しみの中に働かれる方だからです。私たちが神の前にへりくだる時、神はすぐそばにおられます。反対に、私たちが「楽しい」「嬉しい」と満ち足りている時、神は遠く感じられるものです。

だからイエス様は言われました。「心の貧しい者は幸いです。」今を楽しみ、満ち足りている人は、神が遠いのです。しかし、苦しい時にこそ神は最も近くにおられます。

「彼が、わたしを呼び求めれば、わたしは、彼に答えよう。わたしは苦しみのときに彼とともにいて、彼を救い彼に誉れを与えよう。」(詩篇 91:15)

神は、苦しみの時に私たちと共におられる方です。苦しみのただ中で、神ご自身も私たちと共に痛み、共に嘆いてくださいます。だからこそ、あなたが叫び求めるなら、神は救いと誉れを与えると約束しておられるのです。

苦しい時には、どうか神に叫び求めてください。必ず心に平安が訪れます。それは人の言葉では決して与えられない、言葉では言い尽くせないほど深い平安です。その平安の中で、あなたは「神が共にいてくださる」ことを確かに知るようになります。

「この苦しみのときに、彼らが主に向かって叫ぶと、主は彼らを苦悩から救い出された。」（詩篇 107:6）

ここまでの御言葉に共通しているのは、「苦しみの時に、人は神に求めた」ということです。

もしかすると、「神に叫んだけれど、何も起こらなかった」と感じている人がいるかもしれません。しかし、それでもなお、叫び続けてほしいのです。神は必ず答えてくださいます。どうか、あきらめないでください。

神は約束を破る方ではありません。あなたが祈り続けるなら、必ず答えてくださいます。

「苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。」（詩篇 119:71）

「苦しみにあったことは、私にとって幸せでした。」この言葉を、私たちも必ず言える時が来ます。

苦しみの最中は、とても長く感じます。しかし神の目から見れば、それは一瞬です。皆さんも人生を振り返ると、どんな出来事も、良い思い出も苦しい思い出も、今では“一瞬の出来事”として心に残っているはずです。つまり、苦しみは長く続くように見えても、永遠という尺度で見ればほんの一瞬なのです。そして、その苦しみから生まれる喜びと平安は、いつまでも続きます。

「苦しみのうちに、私が主に呼ばわると、主は私に答えられた。」
（詩篇 120:1）

苦しみの中で叫ぶなら、神は必ず答えてくださいます。どんな苦しみであっても、神に助けを求めるなら、神は必ず答えてくださいます。

苦しみは、あなたの心が神に向いている証拠です。私たちは理想を知っているからこそ、現実とのギャップに苦しみます。その理想は神から来ています。

だからこそ、苦しみの時には神に助けてもらえばいいのです。そうすれば、神があなたを引き上げてくださいます。

ここで、新約聖書にも目を向けてみましょう。

「神は、どのような苦しみのときにも、私たちを慰めてくださいます。こうして、私たちも、自分自身が神から受ける慰めによって、どのような苦しみの中にいる人をも慰めることができるのです。」(Ⅱコリント 1:4)

ここでさらに強調されているのは、神は苦しみの種類を問わないということです。友達から言われた一言で心が痛んでも、経済的な不安で押しつぶされそうになっても、自分の能力の限界に苦しんでも、理由は何でも構いません。

苦しみの原因が何であれ、神はそのすべての苦しみの中で、私たちを慰めてくださる方です。どんな苦しみの中にあっても、神はそこにおられます。

「私のあなたがたに対する信頼は大きいのであって、私はあなたがたを大いに誇りとしています。私は慰めに満たされ、どんな苦しみの中にあっても喜びに満ちあふれています。」(Ⅱコリント 7:4)

これこそ、私たちが目指す姿です。どんな苦しみを覚えても、なお喜びに満ちあふれている——神はそのように私たちを導かれる方です。

神は、苦しみを苦しみのまま終わらせることはなさいません。苦しみを通してあなたを引き上げ、そして喜びに満ちあふれる者へと変えてくださるのです。

「さて、兄弟たち。私たちは、マケドニヤの諸教会に与えられた神の恵みを、あなたがたに知らせようと思います。苦しみゆえの激しい試練の中にあっても、彼らの満ちあふれる喜びは、その極度の貧しさにもかかわらず、あふれ出て、その惜しみなく施す富となったのです。」(Ⅱコリント 8:1-2)

マケドニヤの教会は、激しい試練の中にありました。しかし、その苦しみをはるかに上回る喜びが満ちあふれていたと書かれています。まさに、神は苦しみを喜びに変える方です。

多くの苦しみを受けた者は、多くの慰めを受け、そして多くの喜びを手にする——

これがキリストの教えです。

ここで大切なのは、あなたが苦しみをどう扱っているかということです。苦しみをただ「苦しい」で終わらせていないでしょうか。苦しみを神との出会いの場に行っているでしょうか。神はあなたに問いかけています。「あなたは苦しみを、わたしとの接点に行っているか。」「苦しみを苦しみのまま終わらせていないか。」

聖書に登場する信仰の先輩たちは、苦しみを苦しみに終わらせませんでした。苦しみの中で神に叫び、そして喜びに満たされたと証ししています。もしあなたがそれを信じるなら、あなたも同じ道を歩むことができます。

神は言われます。「わたしは必ず答える。」

■苦しみに遭ったときの3つのステップ

1. 苦しみを神の前にそのまま告白する

苦しみに遭ったときの第一のステップは、苦しみをそのまま神の前に告白することです。どんな苦しみでも構いません。「こんなこと言っているのだろうか」という必要はありません。心が痛むなら、その痛みをそのまま神に申し上げてください。詩篇には、苦しみの告白がたくさん記されています。私たちも同じように、苦しみを隠さず、飾らず、ありのまま神に告白するのです。

2. 平安が来るまで祈り続ける(Never Give Up)

第二のステップは、平安が心に来るまで祈り続けることです。

聖書は言います。

「苦しみのうちに私が主に呼ばわると、主は私に答えられた。」

神は必ず答えてくださる方です。だから、あきらめないで神に頼ることを求め続けましょう。“Never Give Up”という言葉は、世の中でもよく使いますが、それは大抵の場合、「願いが実現することをあきらめない」という意味で使われます。私たちにとっては、「神に頼ることを決してあきらめない」という意味です。

あなたが真剣に祈るなら、必ず心に平安が訪れます。その平安が来るまで、祈り続けるのです。

3. 神の言葉を食べる(御言葉を心に蓄える)

第三のステップは、神の言葉を食べることです。祈りによって与えられた平安を保つためには、神の言葉が必要です。聖書には、あなたを励ますために神が用意された

言葉が必ずあります。「神さま、御言葉をください」と祈ってもよいですし、心に覚えている御言葉を思い起こしてもけっこうです。神は聖書を通して、あなたに手紙を書いておられます。その言葉を読み、味わい、心に蓄えてください。それがあなたの平安を揺るぎないものにします。

この御言葉は、その代表です。

「恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。」(イザヤ 41:10)

これは、神があなたに語っておられる言葉です。あなたを励まし、支え、守るために与えられた言葉です。どうか、この御言葉を食べ、信じ、苦しみを喜びへ、平安へ、希望へと変えていただきましょう。これこそが、神が私たちに望んでおられることなのです。